

## 雜 錄

### 美しき靈の告白

成 瀬 無 極

一  
ゲエテの「ウイルヘルム・マイステル修養時代」の一挿話に「美しき靈の告白」(Bekanntnisse einer schönen Seele)と云ふのがある。最も深い宗教的感情を以て書かれた美しい物語である。

「美しき靈」と呼ばれるのは或敬虔なヘルケスン・フト派の尼僧のことで、その経歴は一の靈が如何に神の觀念に目覺め、如何に迷を通して光明に達するかを示す貴重な記録である。

彼女は八歳の時重い病に罹り、夙くも世の享樂から背いて孤獨寂寞の中に悲哀と歡喜とを味はふ

ことを知つた。九個月の間咳嗽と高熱とに惱んだ少女は蝸牛のやうに自己の殻に這ひ隠れて、眼には父の齋らす動植物の標本などを見、耳には種々の物語、とりわけ慈母の誦する聖書の物語を聞いた。斯して病める少女は神に就て聞き神の創造物の一片を見たのである。この幼時の印象は深く彼女の頭に刻み込まれて彼女の宗教的情操の源泉となつた。病が輕快してからも犬や猫や小禽や小羊などに親み、好で讀書に耽つた。就中基督教徒の迫害を描いた小説が彼女に最も深い感興を與へたと云ふ。教會で授けられる一般の宗教的教育は却

て彼女の心を動かさなかつた。彼女は寧ろ佛蘭西語の學修に熱心であつた。舞踏は始め好まなかつたが後に漸々興味を持つやうになつた。舞踏が縁となつて十二三歳の彼女は繪に描いたやうに美しい二人の少年と心易くなつた。子供らしい愛情が彼女をこの兄弟なる兩少年に結びつけた。殊に兄の方が病身なので餘計に虚弱な彼女の同情を牽き、二人の間は漸々親密になつた。弟が之を嫉んで種々の妨害を試るやうになつた。彼女は自分の感情を寓した佛蘭西文の小話を書いて語學の教師に見せて賞讃を博したこともあつた。然し同時に戀愛といふ問題に就て考へさせられた。少年との間は弟の策略で疎隔せられた。幾何も無くこの花の蓄の様な二少年は前後して世を去つた。そして彼女から忘れられた。

彼女は健康を恢復して美しく生ひ立ち世間を見るやうになつた。皇太子の成婚、引續く踐祚の祝

典で市には舞踏、饗譚、演劇などの催があり、多數の賓客が入り込んで雑沓を極めた。彼女もその熱狂裡に捲き込まれた。「妾の生涯中で一番空虚な時であつた」と彼女は告白してゐる。

多くの外客の中にナルチス(Narcissus)と彼女等の仲間で戯れに呼んだ若い廷臣があつた。ナルチスは希臘の神話に見える美しい青年で水に映る我が姿に魂を奪はれて懊惱の餘り自殺したと傳へられる。それは人の愛情に對して無情であつた罰だと云ふ。その血から咲き出でた花が水仙ナルチッセである。されば自己の容姿を誇る伊達者だてしやの異名に用ゐられるのであるが、このナルチスも瀟灑な交際社會の花形であつたに相違無い。然し彼は豊富な知識を持ち世情に通じてゐたので物語の女主人公の兩親に愛せられ、彼女とも親しい交際を結んだ。そしてある宴會で起つた不慮な出來事が二人を許婚の間柄にした。それは無邪氣な遊戯の際に嫉妬深い士

官が突然ナルチスに斬りつけて輕からぬ傷を負はせたのである。人々が驚いて荒れ狂ふ士官を取り鎮めてゐる間に彼女は一人ナルチスを介抱した。滾々と流れる血が彼女の衣を紅に染めた。これが二人の縁を結んだ。ナルチスが癒えてから士官に決闘を申込んで相手を劇しく傷けたといふやうな事はこの話には餘り關係が無い。二人は唯結婚の時期を待つ人であつた。それはナルチスが相當の地位を贏ち得たときと云ふのであつた。

けれども其時期は終に來なかつた。ナルチスの世界と彼女の世界とは漸々離れて行つたのである。彼が花婿として彼女に要求したことは往々彼女の道德的情操と處女らしい羞恥心とを傷けた。彼女は飽迄自分の領域を守つた。彼女はかの少年に對する愛情を想ひ起した。その時佛蘭西語の教師が云つた「眞劍」といふ言葉を想ひ出した。「エルンストハフト」の物語の女主人公は用心しないと、直に眞劍な事

になるかも知れない」と彼は云つた。その時彼女は、つとして神に避難所を求めたのであるが、今度も復神に救を求めた。かくして漸々彼女は神に近づいて行つた。神に近づくに從ひナルチスとの間の思想感情の矛盾が著しくなつて來た。彼女は空虚な社交的歡樂に倦み疲れ、自分の素直な心の生長がそれ等の愚かな戯れに依て萎靡せしめられることを痛切に感じた。けれどもさういふ社會から離れることはナルチスを裏切り怒らすことにならる。彼は何よりも世間體を氣にする男だからである。彼女はこの矛盾に惱んだ。「妾は涙を持つて寢床に就き、晝らぬ夜を明かして、再び涙に濡れた顔をして起き上がった。強い支柱が必要であつた。けれども妾が愚人の眞似をして走り廻はつてゐる中は神様がこの支柱を授けて下さらなかつた。」假令體は無意味な嬉遊の中に置いて心だけは神に向つて開くやうにしやうと決心してもみたがそれ

は徒勞であつた。愚人の服を纏へば、いつか心まで愚人になり切らずにはゐないのである。

彼女はこの心中の苦悶に腕うでき苦んだ。そして終に解決の道を見出した。それは信仰の爲めには戀をも棄てやうといふのである。ナルチスとの關係を深く省察してみるとそれは假初の羈絆に過ぎない、容易に斷ち切れさうである。彼女を眞空の世界に閉ぢ籠めてゐるものは薄い玻璃鐘に過ぎない。それを突き破れば自由の天地が開かれるのだ。

そして彼女は終にその羈絆を絶ち玻璃を破つた。ナルチスは自然に足を遠くした。彼女は然し心の底でナルチスを愛してゐた。かうして離れてみると新たな眼で男が眺められた。もし自分と信條を分つて呉れさへすれば喜んで彼のものとなるのであらうに！けれども二人の世界は全然異つてゐた。愈々分離の時が來なければならぬ。彼女は長い手紙を書いて男に決心を促した。男は不相

變時期を待てとばかり云つて寄越した。彼女は折返へして自分の方からは男の與へた言葉を返しても可いと云つてやつた。九箇月後にナルチスは望み通り地位を得て彼女に改めて求婚した、但、良人の世間的地位に適應するやうな家婦となるといふ條件の下であつた。彼女は懇勤な謝絶の手紙を書いて、恰も幕が下りると一緒に劇場から急いで立ち去る人のやうに此事件から離れた。そして間もなく男が富豪から妻を娶つたといふことを聞いて心から喜び祝した。もう彼女の平和を亂すものは何も無かつた。續いて起る縁談を彼女は悉く拒絶した。慌しい三月と四月の後に最も美はしい五月の空が彼女の前に輝いた。身も心も健かに晴々しく會て經驗しないやうな心の安靜を覺えた。彼女は自由に藝術や學問に身を委ね、繪筆を握つたり讀書をしたり、少數の同好の人々と楽しく交つたりした。社交的歡樂の喪失はこの小さい靜かな

圖鑿に依つた償はれて餘りあつた。

「美しい靈」が世間的欲望の根を絶つて一意求道に進んだ徑路は大體以上の様なるものである。彼女の両親の死、伯父の好意、妹の結婚と病死、信仰ある人々との交誼等の點に就ては茲に語るまい。その代りに彼女の信仰の道程を少しく述べておかう。

はじめから彼女は形式的の教義を喜ばなかつた。また神の恩寵や救済の證あかしを求める人々の心を淺いと思つた。これ等の人々は眞の宗教的靈感を解しないのである。眞の信仰的經驗の無い人々なのである。彼女にとつては無數の零碎の事件が悉く「われ神と共に在り」といふことを證明してゐた。それは恰も吸ふ息吐く息が生命の徴候しるしであるやうに確實なるのであつた。神は彼女の近くに在り、彼女は神の前に在つた。

けれども又恐ろしい不安が彼女を襲ふこともあ

つた。今迄自覺しなかつた「罪」といふ考が彼女を戦慄させた。自分の心の底にも罪の各の素質があるといふことを認めたとき彼女は恐れ惑つた。

ダビデがバテセバに通つた後、悔い悲んで神に祈つた言葉に「視よわれ邪曲ととよのなかにうまれ罪にありてわが母われをはらみたりき」といふ一句がある。彼は原罪ともいふ可きものを認めてゐるのである。しかも「我をあらひたまへ、さらばわれ雪よりも白からん、……あゝ神よわがために清き心をつくり、わが衷つらになほき靈をあらたにおこしたまへ」と云て頻りに祈つてゐる。どうしたらこの罪に汚れた心が淨まるのであらう。基督の血に依つてと説かれたが、どうしてその救が得られるのであらう。彼女は永く此疑問の解決に苦んだ後微かに一道の光を認めた。萬物を創造した不滅の言葉の化身の中に彼女が求めるものがあつた。この最も原始的なる者は曾て吾々が住む下界の住

民として生れた。そして吾々の通る道を、受胎、出産、死亡といふやうに一階毎に辿つて、この奇異な迂路に依て、再びやがて吾々が幸福な生活を送るべき光明界へ歸られたのである。かういふ悟りが臚ろ氣な光の中に彼女に啓示せられた。

けれども如何して此廣大無邊の慈悲に與ることあづかが出来るのであらう。信仰に依てと聖書に誌されてゐる。然し信仰とは何であらう。記載せられた事柄を眞實と思ふだけの事ならばそれは何の役に立たう。その事柄の効果を自分の物としなくてはならない。この攝取的の信仰ともいふべきものは一種特別の心の状態で、自然の儘の人間には得がたいものであるに相違ない。ある日彼女は「神よ、信仰を與へ給へ」と祈つた。胸は張り裂けるやうであつた。涙に濡れた顔を両手の中に埋めた。その時——彼女の魂はある力に依て十字架の方へ牽き寄せられた、曾て基督が血を流した十字架の方

へ牽かれた。それは魂が遠く離れた戀人の方へ牽かれてゆく心地に全く等しかつた。この瞬間に彼女は信仰の何たるかを知つた。「これが信仰なのだ！」かう半ば驚いたやうに叫んで彼女は躍り上がった。この感情は空想とは全く別物であつた。空想も幻影も無かつたが、離れてゐる戀人の俤を想像で描くやうに明確な表象を與へた。

また彼女は靈魂と肉體とが分離するやうな氣持を経験することがあつた。靈が肉を離れて思考するやうに感ぜられた。靈魂は肉體を人が衣服を眺めるやうな眼で見た。過去の事件が驚く可き鮮明に現はれ、未來の豫感が生れた。凡てこれ等の事件は過ぎ去つた、來るべきものもやがて過去となるであらう。肉體は衣服の如く破れ裂けてしまふだらう。けれども妾は、この能く識つてゐる妾は存在する。かう思はれた。

かういふ靈肉の分離に對して彼女の友なる醫師

は眞面目に警告した。外物から離れてかういふ感情に耽れば漸々生活の土臺が掘り崩され、空虚うつろにせられるに違ひない。仕事が人間の第一の使命である。休息の時間は外界の明確な認識に利用すべきもので、これがまた仕事を容易ならしめる所以であると彼は教へた。彼女は従來病勝ちの身として自ら人體の研究に興味を持つてゐたのをこの時から漸々廣く自然界を眺める習慣を養つた。そして一旦信仰を得た安かな心で眺めたとき如何に美はしく自然は彼女の前に現はれたのであらう。今や彼女は自然の中に神を見、創造物の中に造物主を讚美することを知つた。

かくして最後に彼女の達した境地はどんなものであらう。吾々は彼女自身の言葉に聽かうと思ふ――

「妾は戒律といふものを一つも覚えてゐない、妾には何事も掟の形では現はれない。ある衝動があ

つて、妾を常に正しき場處へ導く。妾は自由に自分の意想こころに従ひ、制限といふものも悔恨といふものも知らない。有難いことには妾はこの幸福を誰に負うてゐるかを知つてゐるし又かういふ徳は唯謙遜な心でのみ考へるべきのだといふとも知つてゐる。何故なれば妾は決して自分の能力を誇るといふやうな危険には陥らないだらう、それは、若し神の力が護らなかつたならば、各の人間の胸にどんな恐ろしい怪物が産れて生長してゆくかも知れないといふことを明かに認めてゐるからである。」

## 二

「美しき靈」といふのはスザンナ・フォン・クレッテンベルク(Susanna von Klefenberg)といふ敬虔な婦人のことで、ゲエテの母の友人であつた。この人の書簡や談話からこの一篇の挿話が出来上つたとゲエテ自身「詩と眞」の中で語つてゐる。

一七六八年の夏ゲエテは學府ライプチヒから郷

里へ歸つて來た。身も心も病み疲れて悄然と歸つて來たのである。三年前に笈を負うて家郷を出たときの涙り無い喜びに引きかへて失意の人として歸つて來た。ゲエテの父は愛兒に對して甚だしく不満であつた。家庭の空氣は重く彼を壓した。ゲエテは愈々沈鬱になつた。彼の健康は六七年の十月に落馬して胸を打つてから兎角勝れなかつた。吐血したこともある。また絶えず消化不良に苦んだ。そして一方には戀の痛手を受けてその跡がまだ癒え切らなかつた。その相手はライプチヒの或旗亭の娘なるケエトヒエン・シェーンコップといふ、美しい、優しい、多少人に媚びるうやなゲエテよりも三歳年長の少女であつた。烈しい戀愛が二年以上も續いた。少女も亦若く美しい天才肌のゲエテを心から愛してゐた。彼はこの家で食事をしてゐた。そして後に一卷の詩集となつたやうな多くの詩歌を彼女に寄せた。熱い血の騒ぐ青年詩人は

しかし間も無く盲目的の嫉妬に惱み、そのために無辜の戀人を責め苛む人となつた。彼女の周圍には絶えず若い男の姿があつたからでもあらう。けれどもケエトヒエンは貞淑な少女であつた。ゲエテの爲めに他の客を殊更冷遇することもあつた。それにも拘らずゲエテは往々狂するばかりに嫉妬の情に燃えたのである。そして又一方には良心の苦悶があつた。身分の相違、境遇の隔りが到底この少女との結婚を許さないことを知つてゐた彼は、さういふ末の望み無しに一人の可憐な少女と親んでその胸に果敢ない幸福の夢を描かせることを非常な罪惡だと思つた。それなのにまた思ひ切つて女から離れてしまふことの出来ない自分を絶えず責めてゐた。韻文劇「戀人のむら氣」(Die Liane des Verliebten)は戀する男の利己的な愛情を描き、そのために云ふ可らざる苦みを受ける女の身を憐んだ若いゲエテの懺悔の一片である。



ゲエテは茲に勇氣を起こしてケエトヒエンとの關係を友情的のものに變へた。女は素直に諄らめた。「彼女は天使のやうな女だ」とゲエテは涙を以て一友に書き送つた。後にこの少女はある學士と結婚して幸福な家庭を作つた。ゲエテは歸郷してからも昔の戀人のことを夢みるこゝがあつた。

かういふ身心の創痍に惱んで危く「何人も通過しなくてはならない大いなる海峽」に連れて行かれさうになつた彼も若さと生得の健康の力とに依つて漸々快よくなつていつた。十二月の始めには一時危篤にさへ陥つたのが翌年の三月以後は雪に埋れてゐた草木が緑の芽を吹くやうに若い力を恢復して來た。ゲエテが世間と遠ざかつて靜かな室内の生活を送つたといふことは詩人の眼を内部に向け、胸の中に湧く泉の音に耳を傾けさせ、彼の思想感情を淨化し、深めたといふ點で寧ろ好い影響を與へた。そしてかの「美しき靈」なるクレッテ

ンベルクから受けた慰藉と暗示との如きは詩人の宗教的情操を培ふ上に最も與つて力あるものである。

ゲエテの言葉に依れば彼女は慢性的の病氣に惱める中背うちせの極めて優しい婦人であつた。彼女が病苦を靈魂が假初の旅中に經驗する必然な運命と諦觀して快活な氣分と平靜な態度とを以て堪へ忍んでいつた有様は誠に驚嘆すべきものであつた。彼女の言行は極めて自然で且優美であつた。ゲエテはこの人に依て神に導かれ、また神祕的思想に引き込まれた。そして一時は鍊金術などを眞面目に研究した事さへある。けれども彼は當時の敬虔派ピエタス派の餘弊ともいふべき涙脆ろい一種の宗教的惑溺に陥ること無しに汎神論の色彩を帯びた獨自の宗教觀を樹てて一時の安心を求めた。

ゲエテが語つてゐるやうに「美しき靈」の基督に對する關係は女性がその戀人に對するそのや

うなものであつた。絶對的の服従と無限の信頼とを以て一身を基督にうち委せて、凡ての喜びと凡ての希望とを基督の一身に懸けてゐた。同じ信仰の友でもラヴァーテル (Lavaur) に於ては基督は敬愛する友人のやうなものであつた。その力と事業とを欣慕して之に追隨しやうと力める友人であつた。こゝに兩性の信仰の分れ目があつた。

若いゲエテの樹てた宗教觀は新プラトニ派の思想が根底になつて神秘主義の要素の多分に交つた不思議なものであつた。神は無始から自己を創造しつゝある。創造は雜多無しには考へられないから神は必然的に第二者として現はれる。神の子がそれである。神と神の子とは更に創造を續けて更に第三者の中に現はれる。これも亦等しく存立し、生き且永遠なものである。こゝに於て神の圈ケイプスは閉ぢられた。全然同一のものを更に造り出すことは神と雖も不可能であらう。然し創造力は更に續い

て行つた。その結果彼等は更に第四者を造つた。これは然しそれ自身既に矛盾したものであつた。神の如く絶對的であつて同時にその中に含まれ、それに依て制限せられてゐるからである。これが惡魔ルチフェルである。今や創造力はこのルチフェルに移つて、こゝから凡て他の存在は生るべきことになつた――

この思想の開展は「詩と眞」第八卷に譲つて、最後にもう一度「美しき靈」に立ち歸りたいと思ふ。

「若い、生々した、眼に見えない救ひを憧がれ求める心」とは當時若いゲエテが自ら評した言葉であるが、これは移して現代の多數の青年の心と見ることが出来ると思ふ。眼のあたり歐洲の物質的文明の慘ましい破綻を眺め、省て知識のみに依ては充たすことの出来ない自己内部の缺陷を自覺するとき、刺戟から刺戟へと轉々して神經の麻痺に

一時の陶醉的觀樂を味ひながらも何處からとも無く忍び寄る不安の暗い影を拂ひ退けることが出来ないとき、多感な青年の心は、不知不識に「美しき靈」の愛撫といふやうなものを求めてゐはしないだらうか。ゲエテは男性的の性格の一面に女性的、物に寄り纏るやうな心を持つてゐた。彼はいつも暗い欲求と烈しい情熱の海から自分を救ひ出して呉れるやうな、その人の前には何事も打ち明けられるやうな人物を必要としてゐた。シタイン夫人もその一人であつた。それは美しい總明な姉のやうな人であつた。そしてクレッテンベルクは優しい慈母のやうな人であつたに違ひない。ゲエテの所謂「久遠の女性」の觀念はこの「美しき靈」に依て大部分涵養せられたものでは無からうか。

吾々は感傷的な或は神秘的な宗教的情操を要求するものでは無い。けれども重い熱病に罹つて呻吟してゐるやうな現今の世界が衰へ疲れながらも

云ひしれず快い恢復期に向つたならば、必ず強い宗教的要求を持つに相違無いと信ずるものである。否、既に戦亂の最中に於て、慙濛の夜や、教會の朝に熱心を祈禱の聲が聞えるのである。

傷き疲れた歐洲國民のために「美しき靈」となるものは果して誰であらうか。私はそれに對して何も答へることが出来ない。唯、形式的の教義が全然この方面に無力であるとは確實である。同時にかの ヒヒススムス *Hilfsarmee* の復興の如きも、よし起つても、一時的現象に過ぎず、到底民衆を率ゐる力は無いと思ふ。要するに、その形は問はず、自然と人生とに對する敬虔の心をさへ失はなければ早晚必ず信仰に入れるものと信ずる。ゲエテやケルレルの生涯と作品とが吾々にそれを語つてゐる。